

みんなで自主防災！！



**南海地震等大規模災害に備えよう！！
みんなの助け合いで・・・**

「防災対策」それぞれの役割

市民の役割

自 助（7割）

「自らの身の安全は自ら守る」といった考え方に基づき、市民一人ひとりが自分の命や生活を守るための活動。
知識の習得、耐震対策、備蓄、訓練等。

地域の役割

共 助（2割）

地域の連携による防災活動。
市民一人ひとりが隣人等と協力して、地域を守る活動。
自主防災組織などは典型的な一例。

行政の役割

公 助（1割）

行政が実施主体となる活動。
災害に強い町づくり。
災害発生に的確に対応できる地域作り。
公的機関による救助、応援、備蓄等。

「共 助」

**「自助」のみでは限界がある
自分たちの町は、自分たちで守る！
「助けられる側」ではなく「助ける側」へ**

災害時、未だ公的救援（公助）が十分でない時であっても、同じ現場にいる近隣地域の人々の救援は、おおいに期待でき、その力で被災直後の近隣住民の救出・支援等を行う。防災の「地域力」。

自主防災活動の必要性

地震など大規模な災害の発生とともに、
県・市町村及び防災関係機関は全力で活動する。しかし、



○ 火災や建物の崩壊があちこちで起こり、

直ちにすべてには対応できない。

○ 道路が壊れたり、倒れた建物や放置車両のため、

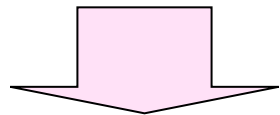
消防車・救急車などの緊急車両の通行が困難になる。

○ 電話がかかりづらくなり、消防や警察への通報が難しくなる。

○ 水道管の破損などで断水となった場合、

十分な消火活動が出来なくなるおそれがある。

○ 大規模地震等の場合は、役所、防災機関の人たちも被災する。



助けは来ない（来られない）！

初期消火、生き埋めの人救出、負傷者の手当て等
被害を軽減できるのは、自分と地域の力

阪神・淡路大震災の死者の分析

(兵庫県警資料から)

死者6,434人

1月17日

地震発生
午前5時46分
～午前6時
(15分間)

約60%

(約3,800人)

(兵庫県監察医検案資料92%)

自助
で守る命

午前6時～
正午(6時間)

約26%

(約1,600人)

救えた命？
共助

正午～深夜0時

約8%

(約500人)

18日以降

約5%

(約300人)

外不明 1%



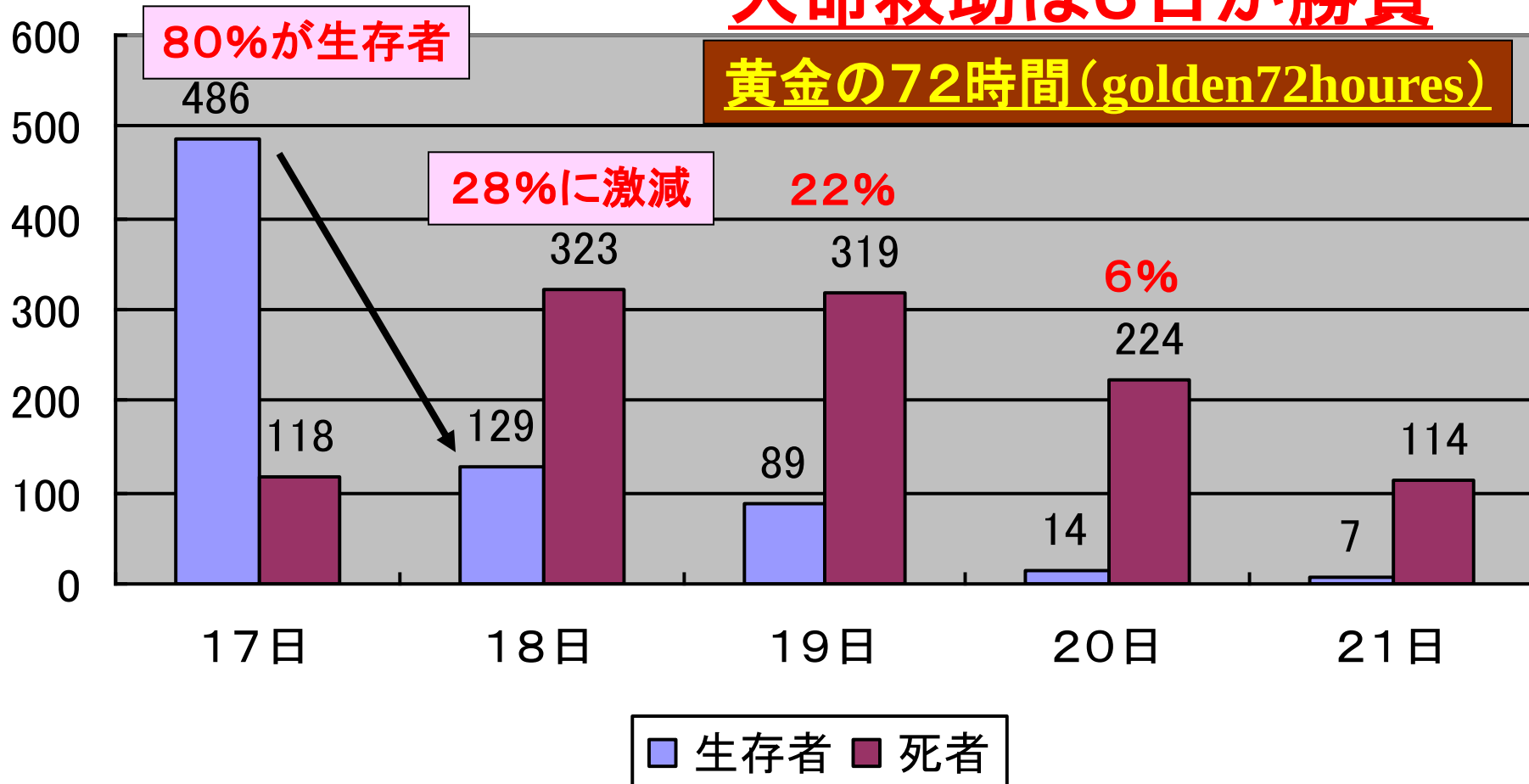
阪神・淡路大震災の救助活動状況

(神戸市消防局資料から)

日別救助人員状況

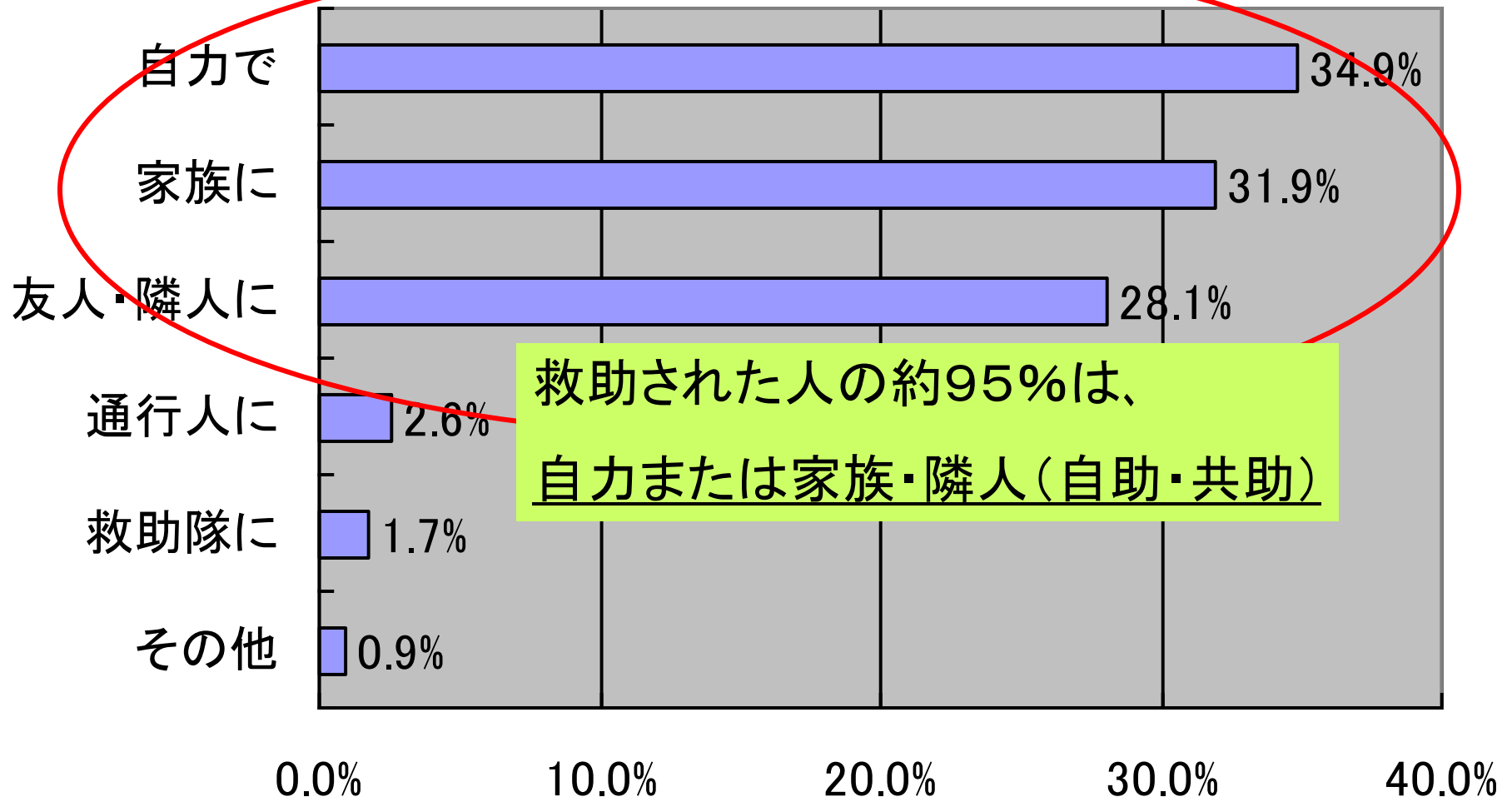
人命救助は3日が勝負

黄金の72時間(golden72hours)



救出・救助にあたったのは

生き埋めや閉じ込められた際の救助（誰に助けられたか）



自主防災組織を作ろう

自主防災組織とは、防災に関する住民の責務を果たすため、地域住民が「自分達の町は、自分達で守る」という目的、連帯感に基づいて自主的に結成する組織。災害時には、災害による被害の防止、軽減のため実際に防災活動にあたる「実働部隊」。

○ 組織づくり

- ・ 既にある組織を活用（町内会、自治会等）
- ・ 新しく組織をつくる
（防災活動が必要と思う住民が集まり）

○ 自主防災活動の三原則

- ・ 楽しく参加できる
- ・ 政治色、宗教色抜き
- ・ 活動の目標・内容が明確、適切である

○ 活動継続のキーワード

- ・ **楽しい** ・ **おもしろい** ・ **カッコいい**



大切なのは、人と人のつながり
（コミュニティ意識の強さ）

地域との交流及び防災訓練への参加

できるだけ地域（近所・町内会等）との交流を持つ（顔なじみを作る）
地域や職場などの防災訓練には、できる限り参加することが大事

- 災害は、予告なしに突然発生する。
- 初動時の現場の情報がゼロである。
- 規模が急速に拡大し、状況が刻々変化する。
- 付近の人はパニック状態に陥っている。
- 人命の危険を伴い、二次災害の発生危険がある。

失見当期

突然の災害に瀕すると

- ◎ 普段やっていることしかできない
- ◎ 普段やっていることも満足にできない
- ◎ 普段やっていないことは絶対にできない



防災訓練

訓練で、疑似体験をする（イザに備える）家族も一緒に参加

- 避難経路の確認
- 防災手帳を持って参加
- SOS発信用の装置を実際に使用
- 災害用伝言ダイヤルの使用法確認
- 避難所の使い勝てなどの確認
- 近隣の人たちとのコミュニケーションを深める（自分の障害を理解してもらう）など